

# 2017 年度男子日本代表 活動報告

## 活動結果、総括

### <公式試合戦跡>

2017年	内容	対戦相手	スコア	勝敗
6月4日	国際親善エキシビション	22歳以下男子日本代表	15 - 6	勝
7月5日	豪州遠征練習試合	Surrey Park Lacrosse Club	15 - 6	勝
7月6日	豪州遠征第1戦	USA Allstars	13 - 11	勝
7月7日	豪州遠征第2戦	オーストラリア代表 GREEN	8 - 11	負
7月8日	豪州遠征第3戦	オーストラリア代表 GOLD	8 - 7	勝
7月9日	豪州遠征決勝戦	オーストラリア代表 GOLD	8 - 7	勝
8月13日	国際親善試合	USA Starz	18 - 6	勝

### <日本代表の目指すラクロス>

「ブロークンシチュエーションを創り出し、数的優位を活かして確実に得点を奪うラクロス。  
得点を狙って奪えるチーム ～接点なくして勝機なし。接点多くして勝機なし～」

### <日本代表3ヵ年強化プラン>

2016年 ベース作り（基礎技術＋基本戦術の浸透／プレーの連続性）

2017年 チーム作り（勝つためのラクロスを身につける／得点パターン作り）

2018年 ゲーム支配力を身につける（狙い通りにボールを奪い、得点を奪う）

### <2017 日本代表・活動テーマ>

『チーム作り』

① 得点パターン作り

(HFO 起点セットプレー／FFO1次・1.5次・2次攻撃＋リスタート／Face off ブレイク)

② ディフェンスシステム確立 (HFD：スパイダー・マンツーマン／FFD (ライド))

③ 勝つためのラクロス (ゲームマネジメントとシチュエーションプレー)

④ 2016年強化項目の徹底 (GB・シュート・事前の状況把握とコミュニケーション・複数選択肢)

\*FFO (フルフィールドオフense)、HFO (ハーフフィールドオフense)、FFD (フルフィールドディフェンス)、  
HFD (ハーフフィールドディフェンス)、GB (グラウンドボール)

### <2017年日本代表・取組事例>

① MFの役割分担 (FFMF (FFD~HFD~FFO) / HFMF (HFO 特化) )

② ゲームマネジメントの実践練習 (時間・得点差を意識した戦い方)

③ 練習試合における延長戦、シチュエーションゲーム (4Q ラスト 10分 2点負け) の実施

④ 選手の運動量把握 (W 杯連戦対策 / 走行距離・運動強度と心拍数の把握)

⑤ 動画活用 (プレーイメージの共有・刷込み)

## <2017年活動総括>

2017年日本代表は、オフェンスは得点パターンを作ることで、ディフェンスは相手に自由なプレーをさせないこと、ボールの奪いどころを定めた組織ディフェンスを確立すること。また、試合中のタイムマネジメントを意識し、Qラスト3～5分で2点奪うためのディフェンス・オフェンス、3Q10分～4Q10分までの勝負の時間帯での戦い方など、勝つためのラクロスを追求しました。

2017年活動の前半（1～3月）では、MFをディフェンスでボールを奪ってFFOで得点を狙うFFMFとHFOにおいてATと共に得点を奪うHFMFに分け、各シチュエーションにおける得点力強化に努めました。

後半（4月以降）は、ディフェンス時のボールの奪い方・奪い処の共有、ゲームマネジメント/タイムマネジメントなども意識したチーム作りを実施。練習試合では、2018年世界大会での厳しい戦いを想定し4Qの試合に続いて、「延長前後半各4分」「再延長（サドンヴィクトリー）」「4Qラスト10分2点負け」などのシチュエーション練習を加え、“勝ち切ること”にこだわりました。

7月のオーストラリア遠征においては、序盤に相手にリードを奪われる展開が続くものの、ゲームマネジメント等、実践を想定した練習の成果を発揮し、最後に“勝ち切る”ラクロスを展開し、遠征を優勝という形で締めくくることができました。

2017年日本代表の最終戦となった国際親善試合・USA Starz戦においては、目指すラクロスである「ブロークンシチュエーションを創り出し、数的優位を活かして確実に得点を奪うラクロス」を展開し、全18得点中13得点をFFO、1得点をFace offブレイクから奪うなど、ボールを奪ってから、チャンスメーカー（フォロー兼攻撃の起点となる選手）、ネクスト（チャンスメーカーからボールを受け、攻撃を仕掛ける選手）に展開していく連動性を大切にされた攻撃により、得点を積み重ねることができました。

チーム作りの点では、オーストラリア遠征において、戦術理解度の高さ・選手間のコミュニケーションの良さなど、「組織力」が世界で戦う上での日本代表の1つの強みであるということを選手・スタッフ共に、改めて認識しました。

また、オーストラリア遠征での唯一の敗戦後のミーティングでは、世界大会でメダルを獲得するために、世界大会経験者はこれまでの世界大会以上のパフォーマンスを発揮すること、世界大会の経験を若手選手に伝えていくこと。未経験者は、連戦の続く世界大会で結果を出すためのイメージを持って準備を進めることの重要性を認識し、個の強化の必要性も強く意識することが出来ました。

尚、2017年日本代表活動においては、各選手の運動量・運動強度を把握するため、GPSによるトラッキングシステムを装着し、各ポジション・選手のパフォーマンス最適化と世界大会における連戦を想定した選手起用のシミュレーションを行いました。

2018年は世界大会でのメダル獲得を目指して、『ゲーム支配力』『未知なる次元でのプレー』をキーワードに、これまで積み上げてきたラクロスを進化させていきます。